

## 18・9世紀ドイツの社会経済思想——ヘーゲル「歴史哲学」研究の新段階

報告者 伊坂青司（神奈川大学 [名]）・神山伸弘（跡見学園女子大学）

討論者 川瀬和也（宮崎公立大学）

世話人 原田哲史（関西学院大学）・大塚雄太（名古屋経済大学）

参加者 約15名

### 第1報告（神山）：歴史的な展開が地理的に併存する論理の提示——ヘーゲル「世界史の哲学」1822/23年講義の提示する世界描像

1. ヘーゲル最初の「世界史哲学講義」（1822/23年）でいう「歴史」は、時間軸のみならず、空間的・地理的併存の多文化性を支持する議論である。ヘーゲルは、その考察方法を「根源的な歴史」、「反省された歴史」、「哲学的な歴史」に分ける。

2. 実証的歴史学は、ヘーゲル的には「反省された歴史」だが、「哲学的な歴史」より低いとヘーゲルが見たわけではない。なぜなら、ヘーゲルは、叙述者の勝手な想像や、事件の抽象的な関連づけや、道徳的な反省により歴史を見ることを斥けるからだ。むしろ、実証性がヘーゲルの歴史観の根底を支えている。「哲学的な歴史」は、その上で具体的で普遍的な世界像を把握するものである。

3. ヘーゲルの歴史観のコアは「精神の原理」であり、世界史はその展開である。「原理」は、出発点であり目的として終着点でもある。民族は、これに従って動き、ここから外れることがない。そこに多文化性がある。「原理」は、自由の自己意識だから、①アジア、②中東、③αギリシア、βローマ、④ヨーロッパという世界史の各段階は、不自由から自由の描写ではなく、いずれも自由なのである。「民族の宗教、法律、言語、習俗、芸術、出来事、行為、他の諸民族への関係」は民族の自由であり、民族がそれで自足しているかぎりそれで構わない。これがヘーゲルの多文化併存のスタンスである。自足しているのに他の——たとえば西洋民主主義の——なにものかを注入することには意味がないとみなしている。

4. この世界史にはヘーゲル以降の歴史が射程に入らないから、我々には、ポスト・ヘーゲル世界史が要求されざるをえない。ヘーゲルのいう「原理」は進展するとともに老衰もするから、ヘーゲルの歴史観は、進歩史観でありながら後退史観でもある。

5. 民族は「原理」が完成すれば充足する。ある民族は、世界史的民族のあり方も「借りもの」として取り入れて後塵を排して生き延びるしかないが、それには、相当程度の教養形成の努力が必要になる。

### 第2報告（伊坂）：ヘーゲル「世界史の哲学」講義の原型と変容

ヘーゲルの「世界史の哲学」初回講義（1822/23年）の講義筆記録（「選集版」）の出版によって、原型というべき初回講義の内容がこれまで一般に使用されてきた旧版テキスト（「グロックナー版」）とは大きく異なることが明らかになりつつある。

最終回講義（1830/31年）をベースにしたグロックナー版によってこれまで流布されてきたヘーゲル「歴史哲学」のイメージは、世界史において東洋人が一人の者しか自由を知らなかったのに対して、ゲルマン人は万人が自由であることを知っているというヨーロッパ中

心主義的な、あるいは世界史には理性が実体として支配していて、諸個人の情熱も「理性の狡知」の手段にされてきたという理性主義的な歴史観である。

これに対して選集版の初回講義テキストでは、人数による自由の発展図式は見られず、むしろ世界史の時間軸と共に地理的自然という空間軸が据えられて諸民族の固有性が浮き彫りにされ、また理性主義的な「理性の狡知」という発想よりも諸個人の情熱に主体的な要素が認められている。5 回行われた「世界史の哲学」講義の 10 年弱にわたる講義内容の変容は、ヘーゲル自身の経年変化によるものなのか、あるいは弟子たちによるテキスト編集上の問題なのか、選集版とグロックナー版の比較によって検証が可能になっている。

諸個人の自由と主体性を重視する初回講義の発想が晩年に理性主義的に変容した責任はヘーゲル自身に求められる一方、初回講義で全時間の半分ほどを割いた東洋世界の論述がグロックナー版では大幅に削減されて、ヨーロッパ中心主義のイメージが流布してきた責任は、もともとの編者に求められなければならない。現代におけるヘーゲルの「世界史の哲学」初回講義の意義は、世界史における諸民族を地理的自然に基づく文化の多元性という視点から考察する可能性にある。

#### 討論者（川瀬）の質問と報告者の回答、ならび一般討論

2つの報告に対して、討論者は、以下の4点について質問した。①現代の歴史（哲）学に対して、ヘーゲル歴史哲学研究から貢献できることはあるか？ ②単なる進歩史観であるという批判をかわせるとしたとき、ヘーゲル歴史哲学の真の限界はどこにあるか？ ③従来のヘーゲル像と比べて東洋世界への理解はずっと深かったと言えるとして、それでもヨーロッパ中心主義的な傾向は否定できないのではないか？ ④ヘーゲル哲学における歴史哲学の位置をどう考えるか？「精神哲学」の一部門の拡張なのか、それを超える意義があるのか？また、討論者から、第2報告に対しては、「民族」を単位として宗教・国家を論じるスタイルや“List”（狡知）概念に関して質問があった。第1報告に対しては、ヘーゲルの実証主義・経験主義的側面を敷衍してほしいとの要望があった。

第1報告者（神山）は、ヘーゲルの実証的な歴史認識は、歴史学的観点からも、またそれに基づく現代理解としても有用である、とした。また、ヨーロッパ中心主義的傾向について、現代ヨーロッパとヘーゲルとの思想的差異に言及した。第2報告者（伊坂）は、地理的自然に根差した民族の固有性を重んじながらも、文化相対主義に陥らず、他の民族や宗教を理解する方向性を示唆する点にヘーゲル歴史哲学の現代的意義を認めた。ただし、自然との共生、あるいは循環型社会といった現代的課題への応答は困難であり、その点での限界はあるとした。ヘーゲルが民族を単位としたことについては、民族と海の関係に着目していたことから、民族間の文化交流局面を重視していたことが指摘された。

フロアからは、ヘーゲルが古い歴史としてのアジアへの着目によって、キリスト教的歴史の限界を克服する意図をもっていたことが指摘された。また、ヘルダーの影響についても質問があり、カール・リッターの地理学的発想も含め、風土論的観点が初回講義に取り入れられたということであった。その他、フロアから多くの質問があり、報告者との間で活発な討論が行われた。